

特集／現代物理学の捉え方

巻頭言

小形 正男

1. 物理学者とは何か？

普通そういうことはしないが、小説家と物理学者を比較してみよう。小説家は原稿を書くためにいつもウンウン言っているイメージがある。しかし一たび書くことが決まって書き出せば、昼も夜もなく原稿用紙を埋めていくのだろう。これは物理学者の生態ととても似ている。しかし、物理学者には締め切りというものはない。その点では、小説家よりはよっぽどラクである。

小説家と物理学者は、何もないところから（実際はそんなこともないが）アイデアを引き出して、ものを書いたり計算したり（実験したり）するのである。新しいことを生み出すのは、つらい仕事であるが、それが好きでやっているのだから苦にならない。しかしへたをすると、何も生み出すことができない可能性がある。技術的に役に立つことに直接結び付くことが難しいことも数多くある。そのため、物理学者の生活はかなり浮世離れしている場合がある。浮世離れしているという点では、ステレオタイプの見方では、哲学者と数学者の次くらいが物理学者である。世の中に小説家という職業が許されているのと同じ程度に、物理学者の存在も許されているのである、と期待したい。

2. 物理学の捉え方

小説の場合には、「文章読本」とか「〇〇〇の書き方」とかの本がある。たとえば「推理小説の書き方」とかである。これらが本当に小説家になるために役立つか？といわれると、それは不明である。本特集はこれに近いものである可能性がある。「数理科学」の特集としてはかなり大胆な部類に入ると予想される。本特集が、物理学者になるために役立つかどうかは分からない。それは、多分に読み手の受け取り方によるだろう。将来の物理学者の卵の養成のために、たまにはこのような大胆な特集があつて、目に触れることがあるのもよいことだと思われる。

3. 作家の本棚

「〇〇〇の書き方」に類似のものとして、「作家の本棚」というものもある。たとえば司馬遼太郎とか立花隆の本棚である。実際、司馬遼太郎記念館（東大阪市）には、実物ではないが、本棚の「イメージ展示」がある。2万冊の本が壁一面を埋め尽くしていて、それらの本の背表紙を眺めているだけでも楽しくなる。だれでも司馬遼太郎や立花